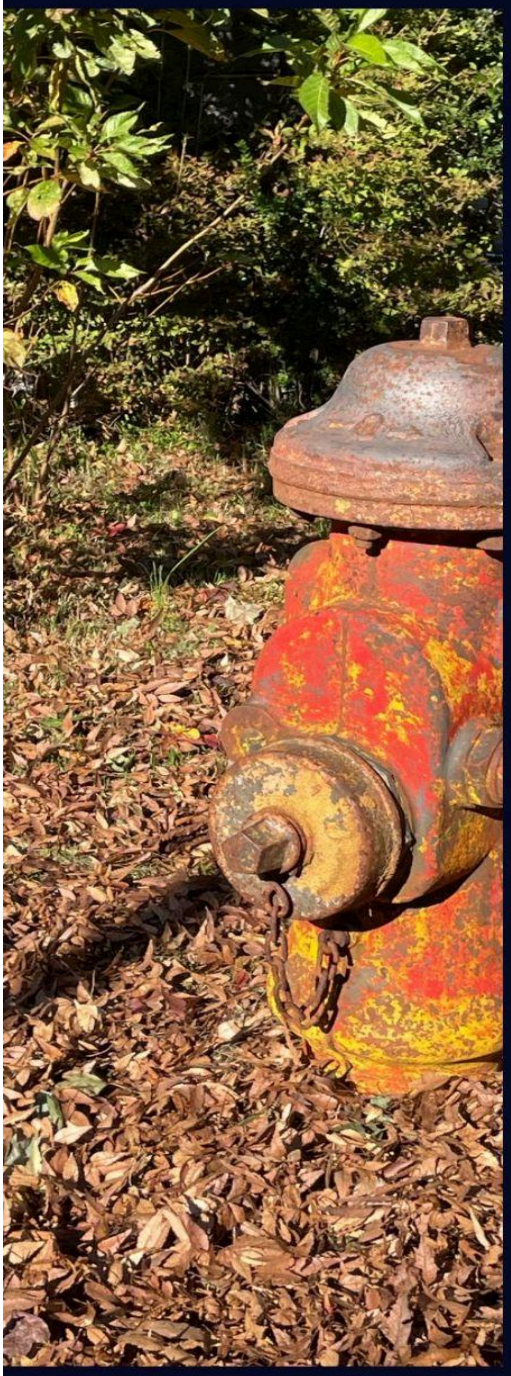
ひとり出版社　雪梅



キャンプ・ドレイク

～米兵視点から探るASAKAの記憶～

佐波優紀　著

キャンプ・ドレイク

～米兵視点から探るASAKA の記憶～

かつて“日本の上海”と呼ばれるほど治安が悪化した埼玉県朝霞市。
朝鮮戦争・ベトナム戦争と2つの戦争の１拠点となったこの地で何があったのか。米軍側から見た朝霞の街や、基地の実態を少しだけ探ってみた。

目次

【はじめに】

【自衛隊の街　朝霞】

【南栄通りとは】

【元米軍関係者の証言～南栄について】
＜朝鮮戦争時代＞
＜ベトナム戦争時代＞

【元米軍関係者の証言～キャンプ関連施設】
＜ベトナム戦争時代＞
①映画館やサッカーをする場所があった
②ゴルフコースがあった
③下士官クラブ（NCO）ではガールズショーが開催されていた

【キャンプ・ドレイクを訪れた日系人】

【南栄にいた在日朝鮮人】

【米兵による事件】

【米兵基地の中の子供たちと、米兵と孤児】
＜米軍基地の中の子供たち＞
＜米兵と日本の孤児との交流＞
① 1954 年2月17 日
② 1956 年3月31 日

【米軍と縁が深かった日本人】
① 15 年間米軍基地でコックを務めた時澤勝之助さん
②昭和の歌謡界を牽引したスターたち
③南栄のコーナーバーにいた“ミチさん”

【米兵たちの苦悩】
～ノース・キャンプ内に設置された249 総合病院で起きていたこと～

【反戦の意思表示をした米兵たち】
～米兵による反戦雑誌『Kill for peace』の発行～

～援助を受けてスウェーデンに渡った脱走兵～

参考文献

【あとがき】

【はじめに】

埼玉県朝霞市に住んでいる——
——市外に住んでいる人にそう伝えると「あぁ、自衛隊があるところね」という返答が返ってくるのではないでしょうか。
朝霞は自衛隊の街。そんな認識をされていますが、ではその前は何があったのか、これを手にされている方ならご存知の方も多いでしょう。

終戦後、今の自衛隊がある場所には米軍基地が置かれました。その名を“キャンプ・ドレイク”と言います。朝霞は空襲の被害を直接は受けなかったため、すぐに進駐軍による土地利用が可能でした。米軍はあえて、朝霞を空襲のターゲットとしなかったのです。

これまでに当時を知る方、教員をしながら聞き取りをされた方など、朝霞の先輩たちが貴重な資料や証言をまとめた書籍を出版されています。自分が知っている朝霞とはかけ離れた凄まじい歴史を見聞きし、当時はとてもショックを受けました。無惨な事件も沢山知りました。

そして調べていくうちに、同時に以下のようなエピソードも知ることになりました。

精神がすさんで教会に逃げ込んだ兵士もいたという。
反戦運動に賛同した米兵もいたという証言も聞いた。

——では米兵側の資料も集めてみようか——　そんな気持ちもわいてきました。

“敗戦国としての日本”
“戦勝国としてのアメリカ”
という視点だけでなく、戦争が起きると、終戦後に渡ってどういう影響が起きるのか、という視点で読んでいただけたら幸いです。

▲現在でも朝霞第一中学校横の旧キャンプ地内に残る東屋（筆者撮影）

【自衛隊の街　朝霞】

東京ドーム19 個分にあたる91 ヘクタールもの広大な敷地の中にある朝霞駐屯地。ここにかつて、米軍基地“キャンプ・ドレイク” の一部がありました。

キャンプ・ドレイクは“キャンプ・ノース” と“キャンプ・サウス”に分かれて形成されており、今の自衛隊がある場所はキャンプ・サウスがあった場所です。

▲現在（2023 年11 月時点）でのGoogle Map の上に、当時のノース・キャンプとサウス・キャンプを重ねた図（個人作成）

参考・市民が集めた朝霞の歴史 ASAKA HISTORY GALLERY

【南栄通りとは】

- 1932（昭和 7）年
  東京ゴルフ倶楽部
- 1941（昭和 16）年
  陸軍予科士官学校
- 1945（昭和 20）年
  アメリカ陸軍進駐

1950（昭和 25）年　朝鮮戦争勃発

1953（昭和 28）年　朝鮮戦争休戦協定

1955（昭和 30）年　ベトナム戦争勃発
※開戦年諸説あり

- 1960（昭和 35）年
  自衛隊駐屯
  ※一部アメリカ軍基地の機能は残す
- 1974（昭和 49）年
  キャンプ・ドレイクほぼ全域が日本に返還

1975（昭和 50）年　ベトナム戦争終結

▲キャンプ・ドレイク簡易年表（筆者作成）

キャンプ・ドレイクがあった頃、米軍の兵士で栄えた繁華街。朝霞駅南口から徒歩15 分ほど歩いた、旧川越街道沿いにあります。

当時はサウス・キャンプとノース・キャンプの間に位置し、キャバレーやバーなどの飲食店のほか、私娼窟やストリップ劇場がありました。
朝鮮戦争やベトナム戦争の特需で街は活気づいたといいます。

キャンプ内にもバーがあり、高官たちはキャンプ内のお店で飲食を楽しんでいたようです。
南栄には現役の軍人が通った飲食店以外にも、“リージョン・クラブ” という退役軍人のためのキャバレーもありました。

一方、 街にはパンパンと呼ばれる私娼たちのほか、やくざも出入りし、風紀が大変乱れました。
当時の面影を残していた建物は年々姿を消しています。記憶に新しいのは、米軍基地時代は飲食店に氷を卸し、近年まで小さなゲームセンターを営んでいた南栄ストアは道路工事のためなくなったことでしょうか。今ではおしゃれな飲食店や住宅が軒を連ねています。

そんな南栄通りの当時の様子を証言する元米軍兵士のコメントを紹介します。

※当時“パンパン”と呼ばれて差別をされた女性がいることを踏まえ、以後ではハニーさんやオンリーさんという言葉を使います。

【元米軍関係者の証言～南栄について】

＜朝鮮戦争時代＞

証言①

Went through Camp Drake in 1950. Remember several men going through a hole in the fence to a cathouse located within walking distance of the post.

I didn't go; the guards were Japanese with shotguns and it didn't seem worth the odd chance that one of them was trigger happy.

1950 年にドレイクキャンプを訪れました。数人の男たちがフェンスの穴を通って、駐屯地から歩いて行ける距離にある売春小屋に向かっていたのを覚えています。

私は行かなかった。警備員は散弾銃を持った日本人で、中にはむやみやたらに銃を撃ちたがる人もいて危険でした。

証言②

I was at Drake from 12/51 till 9/53.

There was a street that ran through separating North ans South Drake.

With 28 bars in it. NIGHTLY ENTERTAINMENT!

私は1951 年12 月から1953 年9 月までキャンプ・ドレイクにいました。

キャンプ・ドレイクの北と南を分ける通りがあり、そこには 28 軒のバーがありました。夜のエンターテイメントです!

＜ベトナム戦争時代＞

I was stationed at camp drake 249th general hospital from oct 66 to aug 68;

I hated the south exit, just a bunch of bars with girls trying to relieve you of your yen; outside the north gate tho was real japan, narrow streets and shops and a short walk to asaka train staion and a whole new world.

私は1966 年10 月から1968 年8 月までキャンプ・ドレイク第249 総合病院に駐在していました。

私は南ゲート（※南栄がある方）が嫌いでした。あの辺はお金をふんだくる女の子がいるバーがたくさんあるだけでした。北ゲートの外にはリアルな日本があり、狭い通りやお店があり、朝霞駅まで歩いてすぐ、まったく新しい世界が広がっていました。

※ 249 総合病院はベトナム戦争下でノース・キャンプに設置された、傷病兵治療のための野戦病院

【元米軍関係者の証言～キャンプ関連施設】

キャンプ・ドレイクには飲食店のほかにも映画館などの娯楽施設もあったほか、ゴルフ場も隣接されていたようです。
また元米兵の中には富士山に登頂したことや、朝霞から近い都心・池袋や新宿で飲み歩いたと証言している人もおり、ずっとキャンプ内及びキャンプ地周辺にいた人ばかりではなかったようです。

＜ベトナム戦争時代＞

①映画館やサッカーをする場所があった

South Camp Drake also had a movie theatre and we played some football games there.
Some of the ‘64 Olympic athletics were supposed to stay at So Camp, but I didnt stay to see it.

サウスキャンプ・ドレークには映画館もあり、そこでサッカーの試合をしました。
1964 年の東京オリンピックの陸上競技の一部はキャンプに滞在することになっていましたが、私はそれを見るために滞在しませんでした。

②ゴルフコースがあった

Camp Drake wasn’t much to look at but it was home for me. I really enjoyed my time in Japan and traveled extensively when I had time off.
I enjoyed playing golf on the golf course that was just outside the base itself... think it was called the Showa-Drake Golf Course but am not positive.

キャンプ・ドレイクはあまり見どころはありませんでしたが、私にとっては家のようでした。
私は日本での時間を本当に楽しんで、休みがあるときは広範囲に旅行に出かけました。
基地のすぐ外にあるゴルフコースでゴルフを楽しみました... 昭和ドレークゴルフコースと呼ばれていたと思いますが、定かではありません。

③下士官クラブ（**NCO**）ではガールズショーが開催されていた

I have many memories of making the ASAKA - Shinjuku - Shibuya -Ikebukuro drinking stops. I think our first CO was a Capt then he got transferred and a Maj took over. We had GREAT GIRLY SHOWS at the NCO club but when the Maj. took over they stopped.

私は朝霞～新宿～渋谷～池袋と飲み歩いた思い出がたくさんあります。
私たちの最初のCO は大佐だったと思いますが、その後彼は転勤し、少佐が引き継ぎました。私たちは下士官クラブで素晴らしいガールズショーを開催していましたが、少佐が引き継いだとき、打ち止めになりました。

引用：https://lifeslittleadventures.typepad.com　コメントより

【キャンプ・ドレイクを訪れた日系人】

アメリカにいた日系人たちは第二次世界大戦、そして太平洋戦争に進む中で苦しい立ち位置に追い込まれます。
戦後、キャンプ・ドレイクに米兵として訪れた二人の日系人の証言を紹介します。

ヒロシ・H・ミヤムラさん

日系二世で、朝鮮戦争での戦果により名誉勲章を授与されたヒロシ・H・ミヤムラさんは、テキサス州で訓練を受けた後、キャンプ・ドレイクに派遣され、九州を経て韓国へ上陸したと語っています。

カメモト・ミツグさん

同じく日系二世のカメモト・ミツグさんは、「日本人は私をアメリカ兵とみなしていたからか話しかけられることはなかった」としながら、初めてキャンプ・ドレイクに行った時と、仙台に派遣された時には、英語を勉強している日本人から話しかけられたと回顧しています。
キャンプ・ドレイクから東京に行くバスに乗ったときにバキュームカー（米兵の間では“honey bucket wagon（ハニーバケットワゴン” と呼ばれていた）を見たと話しています。

また、朝霞に生まれ育ち、子供の頃から自身の家にパンパンと呼ばれる女性たちが出入りしていた田中利夫さんによると、駐屯兵の中に日系二世のヤマモトという通訳がおり、朝霞の住民からは嫌われていたと言います。（『占領下の女性たち』より）

余談・作家の山本周五郎さんのエッセイの中に偶然“ハニーバケット” の記述を見つけました。意味は同じくバキュームカー。しかも見かける場所も時間帯もカメモトさんと一致しています。

「日本語として使われていたのかも」と思い広辞苑で調べたものの見つからず。半信半疑でインターネットで検索をかけても、美味しそうなハニートーストのレシピやハニーバケットがスラングであることを説明するページばかりが表示されます。

日本人の間でも一般に使用された言葉なのか気になるところですが、キレイな話でもないのでここら辺に留めておくことにします。ただ個人的には面白い発見でしたので、同じように興味をもたれる人がいる可能性も考え、一部の人に向けてここに共有します。

山本周五郎さんはそれが都会を走る様子を見て“東京五輪を控えているのに外国人に見られて恥とも思わないのか” と綴っています。
ちなみにカメモトさんのインタビュアーはバキュームカーが理解できず、何度も聞き返しています。

参考：山本周五郎『暗がりの弁当』より 日録(p16 ×月×日)・景気のこちら側

【南栄にいた在日朝鮮人】

南栄の街にいたのは日本人・アメリカ人だけではありませんでした。東京ゴルフ倶楽部から陸軍士官学校に変わるとき、凹凸があるゴルフ場を平らに均すために多大な労働力が必要でした。そこで朝鮮人労働者を連れてきたのです。

他にも朝霞にはいくつかの朝鮮人街があり、彼らの一部は太平洋戦争終戦後も日本に残ります。当時、日本人と朝鮮人との間で度々刃物を交えるほどの喧嘩が起きたといいます。

朝鮮戦争では義勇兵を志願する者もおり、激戦地に送られ、生き延びても報酬がもらえず北朝鮮の工作員になることを打診されるなど、母国と日本との間で板挟みに遭い、悲劇的な運命をたどります。

【米兵による事件】

戦争が激しさを増す中で精神を病む米兵ただ精神を病んだ米兵の中には、日本人にその矛先を向ける人もいました。
猫を銃で撃つ米兵。「猫と間違えた」と言い、基地の外にいた一般人に向けて発砲し、死なせる事件も起きました。
しかしGHQ の占領下であった情報規制の下、事件は闇に隠されたのです。

ところ変わって1950（昭和25）年、福岡県小倉市（現北九州市）にて" 小倉黒人米兵集団脱走事件"も起きています。基地から脱走した米兵たちが、近隣住民に対し暴行や強姦を行ったものの、ほとんど報道がされなかった事件です。

近隣住民が米兵による犯罪に巻き込まれても、—たとえ殺人であっても—GHQ の管理下であった日本では、加害者が検挙されることは稀でした。なお、この事件を題材に書かれたのが、作家の松本清張さんの『黒地の絵』です。

【米兵基地の中の子供たちと、米兵と孤児】

＜米軍基地の中の子供たち＞

米兵の子供たちのための学校も用意されていました。"ドレイク・ジュニアハイスクール" では新聞が発行されていたことも分かっています。

内容を見てみると、大和高校で第1 回中学校陸上競技大会が開催され、参加したことや、上野動物園に見学に行ったこと。そしてスズキ サナエさんとヨコウチ ヒロヤスさんが東京大神宮で挙式を挙げ、ドレイク・ジュニアハイスクールの教員たちも披露宴に列席したことを伝える記事もありました。見出しに「Yoko marries」と書いてあることからしても、おそらく学校のヨコウチさんは学校の教員か、関係者だったと思われます。

https://www.classmates.com に登録されている卒業生のサイトを見てみると、苗字が日本の姓の卒業生がいることから、おそらくハーフか日系人の子供がいたことが推測されます。確認がとれている限りでは、約70 人の卒業生がいるようです。

＜米兵と日本の孤児との交流＞

① 1954 年2月17 日

米軍基地内の補充隊（The Camp Drake Replacement Depot）が1951（昭和26）年11 月から基地内に孤児院“アイセイエン”の子供たちを集めて、クリスマスパーティを開いていたことが分かる記録があります。

1954 年2月17 日にCamp Drake Field Houseで開催された当時の写真は、昭和館デジタルアーカイブから見ることができます。

パーティは駐屯員の家族の住宅地にあるジムで行われ、エルマー・ホワイトヘッド曹長がサンタクロースに扮し、子供たちに接する様子が写っています。

●資料

1954 年2月17 日に開催されたクリスマスパーティについて、当時の招待状（プログラム）を見つけました。権利の関係で画像の添付ができないため、その内容をテキスト化して一部紹介します。

▼表紙

Camp Drake Replacement Depot
Announces
The Fourth Annual
Orphans Christmas Party
Friday, 17 December 1954
13:00 – 15:00 Hours
Camp Drake Field House

▼プログラム

PROGRAM
ARRIVAL AND SE(TING OF CHILDREN
OFFICIAL WELCOME TO THE PARTY
COL. HENRY J. STARK
DISTRIBUTION OF REFRESHMENTS TO
CHILDREN
ENTERTAINMENT SKITS
METROFOLITAN
AI SET-EN
GRACE
SAINT TOSEPIT
NATIVITY PAGEANT
CHAPLAIN LINDNER
SANTA CLAUS AND DISTRIBUTION OF GIFTS
M/SGT ELMER J. WHITEHEAD
INTERPRETER
M/SGT ARAKAKI

▼歴史（経緯）

キャンプ・ドレイク補充隊による基金が1951 年に設立され、基金に集められた支援金は複数の孤児院に寄付をされたことなどが書かれている

HISTORY
The Camp Drake Replacement Depot Indigenous Charities Fund was established on November 13, 1951 for the purpose of creating a centralized agency to raise money for orphanages, old people's homes, and other benevolent institutions. A Fund Council was appointed and an immediate drive to raise money was started.
During the period from November, 1951 to April, 1953, a total of $122,713.78 was voluntarily contributed by transient and permanent party personnel of the Camp Drake Replacement Depot to this fund and was given to following institutions:
Grace Orphanage
Aisei-en Home
Saint Joseph's Home
Saint Odelia Orphanage
Metropolitan Orphanage
Aike Gakuen(Summer Camp)
In addition to the avove, Christmas Parties were held in 1951, 1952 and 1953 for orphans in the Metropolitan Tokyo area.
In April of 1953 it was decided to dissolve this fund and to set up a trust fund for four orphanages. At this time the fund had a total of $52,626.27 on deposit in the bank. The Council decided to give $1500 to the Seiyo Orphanage to help rebuild the physical plant which had been des : royed by fi re a short time before. In addition $1126.27 was donated to the Japan Red Cross Ohphanage in appreciation for the help received from the Japan Red Cross in administering the trust fund to be established. This left a balance of $50,000 to be placed on deposit in the trust fund. On April 30, 1953 the Fund Council held its fi nal meeting. At this meeting the chairman of the Council delivered a check in the amount of $50, 000.00 to Prince T. Shimazu, President of the Japan Red Cross, for deposit, in order that the trust fund could be established for the Aisei-en Home, Grace Ohphanage, Metropolitan Ohphanage and Saint Joseph's Home.
The agreement hich established this trust fund stipulated that the Yen equivalent of $5,000.00 be withdrawn from the bank once each year for distribution to the above orphanages, on a percentage basis, until the fund is deposited. It is estimated that the money deposited to the Trust Fund, plus interest accruing, will sustain the fund for approximately 14 years.

② 1956 年3月31 日

その後の活動としては、1956 年（昭和31）3 月31 日にはサービスクラブ（The Camp Drake Service Club）がセイビ学園児童養護施設の子供たちのためのパーティーを主催した記録も、同じく昭和館デジタルアーカイブで確認できます。

【米軍と縁が深かった日本人】

米軍にいたのはアメリカ人だけではありませんでした。
続いては、米軍基地で働いた日本人や米兵との関係が深かった日本人について紹介します。

① 15 年間米軍基地でコックを務めた時澤勝之助さん

1956（昭和31）年から15 年間、ずっと米軍関係の施設でコックをしていた時澤さん。最初は王子にあった陸軍地図局で8年間勤務し、西六本木を経て最後は朝霞の米軍基地の通信隊に勤めました。

時澤さんが働いていたのは下士官クラスの人が使う“NCO クラブ”。キャンプ・ドレイクのNCO クラブはノース・キャンプ内にありました。時澤さんは「そこは誰もが入れる場所でもなく、お金を払って食べる高級なところなんですよ」と語っています。

時澤さんは東京都練馬区石神井で“和風スナック とき” というお店を開き、米軍基地で学び、好評だった料理を日本人好みにアレンジして多くの人に愛されました。
しかし残念ながら時澤さんは2017年にお亡くなりになりました。お店は現在閉店したそうです。

※ NCO クラブ…米軍基地内にあった下士官クラブ。

②昭和の歌謡界を牽引したスターたち

キャンプ・ドレイクには後に歌謡界を牽引することになるスターたちが歌っていました。一部紹介すると、ペギー葉山さん、フランク永井さん、江利チエミさん、雪村いずみさんなどです。

フランク永井さんは元々進駐軍でトレーラーの運転手をしていました。この時の愛称が“フランク” だったことから芸名が付けられたようです。

また基地返還後になりますが、人気ロックバンド“THE ALFEE” が1989（平成元）年にキャンプ跡地で一夜限りのライブイベントを開催しています。ライブの様子は2023 年12 月現在youtube で見ることができます。（https://www.youtube.com/watch?v=jQV5X3I7UpI）

③南栄のコーナーバーにいた“ミチさん”

真偽のところは確かめようがないですが、南栄には、スパイのような役目をになった人もいたようです。こんな証言がありました。

I was a CID agent assigned to Camp Drake from 1967 to 1968. The assignment did have a whole lot of police work but there were several memorial situations.
Several people mention the “Corner Bar” which was my main operating base. Anyone going during that time period will surely remember “Michi”, an extremely tall girl for a Japanese; she was my main “confidential informant” who helped me on some cases.

私は 1967（昭和42）年から1968 年までキャンプ・ドレイクにCID 捜査官として配属されました。その任務では捜査がたくさんありましたが、いくつかの思い出深い出来事もありました。
私の主な活動拠点であった“ コーナーバー” について言及する人もいます。この時代にコーナーバーに行った人なら誰でも、日本人としては非常に背の高い女の子“ ミチ” を覚えているでしょう。彼女は私の主要な“ 機密情報提供者” で、私は何回か彼女の情報に助けられました。

※ CID…アメリカ陸軍犯罪捜査司令部（Criminal Investigation Division）の略称。

※コーナーバー…現栄町４丁目にの交差点沿いにあったと推測されるバー

▲現在の米軍の階級表

【米兵たちの苦悩】

～ノース・キャンプ内に設置された249 総合病院で起きていたこと～

朝鮮戦争、ベトナム戦争と激戦が続く中、ベトナム戦争中にノース・キャンプ内に設置された249 総合病院は、傷病兵のための野戦病院でした。その第249 総合病院の中には神経精神科病棟もあり、毎日数時間も泣き続ける兵士や、弾丸を頭に受けたことで植物状態になった兵士がいました。

そこに、身体的な傷を負ったウィリアム・G・ハネケ（当時大尉、以下ハネケ氏） が運び込まれました。ハネケ氏はお父さんも軍人で、太平洋戦争が終結した1945（昭和20）年に極東空軍司令部の財務将校として東京に転勤。そこで、ダグラス・マッカーサーと彼のスタッフと協力し、日本の経済再建に向けて助言を行ったと述べています。

ハネケ氏は少年時代を日本で過ごしたことから、早い段階で日本語を理解し、話すことができたそうです。

ハネケ氏は249 総合病院を含む、自らの戦争体験をまとめた『Trust Not』を出版。249総合病院での過酷な体験を明かしています。
その一部を紹介します。

こちらの書籍は翻訳されておらず、私的に翻訳したものであることをご了承ください。

＜闘病生活を送った神経精神病棟について＞

南ベトナムから249総合病院に運び込まれ、そこの神経精神病棟で過ごすことになった。
そこにいる患者は、それぞれ深い心の傷を抱えていた。自分の部隊が制圧され、口をきけなくなった兵士や、パイロットが乗っていた2機のヘリが次々と撃墜され、乗組員全員を失った経験を持つ兵士もいた。

特にヘリコプターパイロットが自責の念にかられ、毎日数時間も泣き崩れる姿は、彼が経験した出来事がいかに深刻で影響的だったかを物語っている。そして、AK-47の弾丸で直接頭を負傷し、今では生活の大部分を植物状態で過ごしている二人の歩兵もいた。

私は軍医に、「他の患者たちは精神的な傷を抱えているのに対して、私は多くの身体的な傷を負っている。自分が正しい病棟に割り当てられているのか」と尋ねた。

軍医は私の重度な頭部外傷のために、これが私にとって適切な措置であり、他の傷に対してもここで十分な治療を受けることになると答えた。

＜乱暴な処置＞

体中何針も縫い、顎にも損傷があったため、流動食しか食べられなかったハネケ氏。
しかしそんな彼に取られた処置は、あまりにもずさんなものでした。縫われた針を外す際に“ 生肉をも切られた” としたうえで“（処置をした看護師は）中世の拷問の教育を受けているのかと思うほど痛かった” と回顧しています。

興味深いのは、病院内にしたのはアメリカ人だけではなかったということ。
ハネケ氏の著書の中では理学療法士と栄養士、二人の日本人女性が出てきますが、彼女たちは日本語訛りながら英語を話すことができたそうです。

ある日、流暢な英語を話す日本人女性が現れた。彼女は理学療法士で丁寧に施術してくれた。
しかし彼女の上司である日本人男性が現れ彼女を叱責。どうやら一人当たり30分しかかけてはいけないところを、私の施術に45分もかけたことで怒られたようだ。

彼女が私について「30分の施術では終わらない患者だ」と説明しても、彼女の上司は30分という制限を曲げなかった。
また今度は日本人の栄養士の女性がきて、流動食でも栄養が取れるように考えてくれた。

＜訪れた穏やかなひと時“感謝祭”＞

そんな闘病生活の中でも、アメリカの伝統行事である感謝祭は行われていたようで、ハネケ氏はひとときの安らかな時間を過ごします。

キャンプドレイクでも感謝祭が行われた。1968年11月28日、リラックスしたムードで人員も削減された。
お昼を少しすぎ、患者たちに感謝祭の食事が運ばれてきた。七面鳥、マッシュポテト、グレービーソース、インゲン、パンプキンパイの盛り合わせ……。
それらはそれは伝統的なアメリカの感謝祭 の食事だった。他の全員に食事が終わると、栄養指導員が私に流動食を持ってきてくれた。
クリームターキースープ、リンゴ ジュース、そして私のリクエストのルートビアシェイク。私 はそれをすべて食べることができ、感謝祭の日まで生き残ることができたことに、とても感謝した。

＜足と腕を切断しなければならないと説明され脱出を決意＞

しかし、ある日ハネケ氏は、治療を担当する外科医から思いもよらぬことを告げられ戸惑います。
そして病院からの脱出を決意するのです。

ある日、外科医から左足と右腕を切断しなければらないと説明される。だが別の医者の判断を仰ぐと、切断の必要はないとのことだった。

このことを含め、249総合病院で受けた仕打ちを、見舞いに来てくれた妹のマーガレットに話し、「手術前にこの病院から出るのを手伝ってもらえないか」と尋ねた。そして陸軍士官学校（ウェストポイント）の仲間であるボブ・マーリルをも頼り、病院から抜け出す計画を立てることにした。

翌日、軍医がやってきて「左足と右腕の切断について同意書を書いてほしい」と言ったが、自分の傷が治っていると（他の医療関係者から）聞いたことがあったので断った。
医師は身体損傷なのに神経精神科にいる私に対し「あなたは間違っている。患者たちは皆精神的に無能力であるし、本当はあなたの許可は必要ない」と言った。

私はアメリカ軍犯罪捜査本部−Judge Advocate General(JAG)−の法律家に相談することを決めた。そして軍人だった父の伝手を頼り、事はアメリカ陸軍副参謀総長、ブルース・パーマー・ジュニアよりハネケ氏の治療を担当していた外科医に指導が入る事態に。このことは病院中の噂になっていたようだ。
そして私は249総合病院を去り、本国のウォルターリード陸軍医療センターに運ばれた。

＜249総合病院にいたスタッフへの処罰＞

無事、本国への帰還を果たしたハネケ氏。その後、米軍の野戦病院に対する調査が開始されます。
そしてハネケ氏に対して不適切な治療を行った医療関係者たちは懲戒措置がとられることとなりました。

私の249総合病院での経験は、この施設の患者ケアの手順と運営に大きな影響を与えた。調査が完了すると、違反した医師やスタッフに対していくつかの懲戒措置が取られた。これには、整形外科医を全員別の任務に転勤させることが含まれていた。

陸軍軍医総監のヒートン中将は、日本、フィリピン、グアム、ハワイ、およびアメリカのすべての米軍病院に対する調査を命じ、患者、特に戦闘で負傷した患者が最高のケアを受け、不用意な医療処置を受けていないことを確かめるなどの措置を行うに至った。

私にとっては困難な帰国の旅だったが、負傷した仲間たちにとっては事態が良い方向に動いたことを知って、報われた気がした。

【反戦の意思表示をした米兵たち】

～米兵による反戦雑誌『Kill for peace』の発行～

1969（昭和44）年、キャンプ・ドレイクの米兵が反戦雑誌『Kill for peace』を発行します。この雑誌の中に、当時1965年に発足したベトナム戦争反対団体“ベトナムに平和を!市民連合（ベ平連）”のデモ運動の影響があったことが窺える文章があるので掲載します。

COMMUNISTS???

Many mornings, outside the fence, in front of one of the war is, there have been people demonstrating against the war in Viet Nam and for the removal of a certain U.S. Army post from Japan. No one wants war and we can't blame these people for not wanting us here.

How would you like a bunch of Japanese soldiers running your home town? Did you ever stop to think of why there are no foreign military bases in the U.S.A. but the U.S.A. has military bases in the world? You would not like the idea of French, Vietnamese, or Japanese soldiers running around your home town and would probably hold more rallies and demonstrations than these people are. Try to go to the fence and talk to these people and ask them why they demonstrate. The MPs would not let you. They will more than likely tell you the people are co■unists.

They are not. We of "Kill For Peace" have talked to them. All they want is the removal of the U.S. miliary presence from their land. More than likely you don't want to be here any more than they want you here. They are simply antimilitary and so much anti-American. We believe in their cause and we urge you to listen and try to understand them.

（意訳）朝、度々フェンスの外でベトナム戦争に反対し、日本から特定の米軍駐屯地を撤去することを求める人々がデモを行っていた。誰も戦争を望んでいないし、彼らが私たちがここにいること自体を望んでいないことについて、彼らを責めることはできない。

もし、大勢の日本兵があなたの街を闊歩していたらどう思う？ あなたはこれまで、アメリカ軍基地が世界各国にあるのに、なぜアメリカには海外の軍隊の基地がないのかということを考えたことはあるだろうか。誰もフランス人、ベトナム人、または日本の兵士が自宅の周辺でうろつかれるのを好まないだろうし、もしそうなれば、おそらく今外国で行われている以上に、アメリカでは多くの集会やデモを開催されるだろう。

キャンプ・ドレイクのフェンスに行って、人々に話しかけ、なぜデモをするのか尋ねてみてほしい。憲兵たちはあなたを許さないだろうし、彼らはおそらくデモを行っている人々が共産主義者であると言うだろう。

彼らは共産主義者ではない。私たち『Kill For Peace』は彼らと話をした。彼らが望んでいるのは、自分たちの土地から米軍が撤去することだけだ。おそらく、あなたがここにいたくないとのと同じように、彼らは私たちにここにいてほしくないのだ。

彼らは単に反戦派であり、非常に反米的だ。私たちは彼らの目的を信じ、皆さんにも彼らの意見に耳を傾け、理解しようとすることを強く勧める。

出典：Wisconsin Historical Society　所蔵より

～援助を受けてスウェーデンに渡った脱走兵～

『兄弟よ俺はもう帰らない』は、ベ平連の援助で中立国であるスウェーデンへ逃亡をした米兵、テリー・ホイットニーさんの著書です。キャンプ・ドレイクの兵士ではありませんでしたが、貴重な証言として紹介します。

彼が横浜にある野戦病院にいた時、市電で後に恋人となる“タキ”と出会います。
そして戦争に懐疑的なタキさんの思想に徐々に共感を覚え、彼女の紹介でベ平連にコンタクトを取り、ソ連を経て、他数名の米兵とともに中立国として脱走兵を受け入れていたスウェーデンに渡りました。

ベ平連の発起人の一人である鶴見俊輔さんの著書『言い残しておくこと』の中に、鶴見さんの姉である鶴見和子さんが一人で住んでいた練馬区・関町の自宅の二階にホイットニーさんとタキさんの二人を泊めたことが書かれています。

当時米兵、特にアフリカ系アメリカ人に対する恐怖心が強かった日本ですが、ベ平連の一人が突然和子さんの家に訪れ、二人を匿ってほしいことを告げるとあっさりと「いいですよ」と言ったそうです。
鶴見さんはそのエピソードを聞いて驚きつつも、お姉さんについて“そういう人だ”と振り返っています。

参考文献

＜インターネット＞

Life’s Little Adventures…https://lifeslittleadventures.typepad.com
JAMHC…https://ndajams.omeka.net
ドレイク・ジュニアハイスクール新聞…ebay出品品（https://www.ebay.com/itm/404203393354）
ヒトトヒトサラ（時澤勝之助さん）…https://www.hitosara-shikouhin.jp/onedish/onedish44.html
市民が集めた朝霞の歴史 ASAKA HISTORY GALLERY…https://asakacity.wordpress.com
東京ゴルフ倶楽部公式サイト…https://www.tokyogolfclub.jp
朝霞市役所公式サイト…https://www.city.asaka.lg.jp
『Kill for peace』…https://content.wisconsinhistory.org
ほかhttps://www.sekaimon.com、https://i.ebayimg.com

＜書籍＞

君たちにつたえたい 朝霞、そこは基地の街だった。（ISBN：978-4816606083）
君たちに伝えたい〈2〉朝霞、キャンプ・ドレイク物語。（ISBN：978-4816606083）
金ちゃんの少年時代（ISBN：978-4990968601）
Trust Not（ISBN：978-1452810317）
在日義勇兵帰還せず: 朝鮮戦争秘史（ISBN：978-4000230186）
占領下の女性たち：（ISBN：978-4000616010）
言い残しておくこと：（ISBN：978-4861822704）
兄弟よ俺はもう帰らない：（ISBN：978-4807493142）

【あとがき】

自分の住んでいる街にかつて米軍基地があった――。
それだけの知識と、年季の入ったスナックの光景とが繋がったのは中学生になってからでした。家の近くにある大人の世界が、かつては米兵の男性たちのためにあったものだったと気付いてからは、今も残る不思議な英語で書かれた古い建物の過去の姿を想像するようになりました。
そして、自身が成長するにつれて失われていく「日本の上海」とまで呼ばれた街の面影が、妙に貴重なものにも思えてきたのです。

私は南栄で育ちました。地域を管轄する栄町町内会は、子供が参加するイベントにとても熱心でした。
小学生の頃、町内会対抗の運動会が近くなると、夜に地域の子供たちが南栄子供遊園地に集められました。そして栄町町内会に所属するあるおじいさんの指導の下、かけっこの練習をしていました。このおじいさんが大変怖かったのです。緩く曲がった腰と顔に刻まれた深い皺には相応しくないほどの鋭い眼光で、私たちが走る様子をじっと目で追います。真剣に走らないと怒られるのは当然。練習に飽きてふざけて遊んでいる子を強く叱る姿は今でも鮮明に覚えています。私も何度も喝を飛ばされました。
ですが、あの厳しいおじいさんは、かつての風紀が乱れた南栄の子供たちを守るために奮闘した大人の一人ではなかったのではないか、と今になって思います。

どうして子供の地域活動に熱心だったか。今なら分かる気がするのです。売春の客引きや“パンパンごっこ”を始めた子供たちを守るため、奮闘した地域の大人たちの姿が、私が子供だった頃にはまだ残っていました。

見守ってくれていたのは町内会で会う人たちだけではありませんでした。
母とクリーニングされた服を受け取りに行くと、自作した小さなぬいぐるみをプレゼントしてくれた星野たばこ店のおばあちゃん。
いつも優しく声をかけてくれた、パーマヘアの金子酒店のおじさん。
初めて一人でおつかいに行ったとき、一緒に小銭を数えてくれた食料品店のおばちゃん。
――私が知る南栄は、負の歴史を抱えながらも、子供の成長を地域で見守る優しい街でもありました。でもそれは当たり前の光景ではなく、地域の子供を思う大人たちの強い結束があってこそ生まれた雰囲気であったように思います。そんな優しい生き証人の方々と、ひと時でも関われたことは私の誇りです。

戦争は、戦争中にだけ人々に影響を及ぼすものではありません。戦後になってから、新たに生まれる悲劇もあります。そこで奪われた命も戦死者に含まれると私は思います。

拙誌では、あくまで事実だけを伝えることに努めました。ただ、一次資料だけを読むことは、自分にとって都合のよい解釈だけを選択しかねないことを念頭に置く必要があると考えています。事実を集めた段階で終わるのではなく、多くの本を読み、多くの歴史家の意見に触れることは、私自身の課題です。
この朝霞という場所の過去を知ることは、朝霞市民のみならず、多くの人にとって今後の社会の未来図を考える1つの手掛かりになるはずです。

互いを憎むのではなく、戦争を、兵器を憎む社会になることを祈ります。

Youtube開設しました
昭和史散歩
https://www.youtube.com/@showa-historyWalk

編集・校正　雪梅
執筆　佐波優紀
2023年12月4日